

感染症拡大前後の大学間単位互換授業に対する受講生の評価比較

Comparison of Student Evaluations of Intercollegiate Credit Transfer Classes Before and After Spread of Infectious Diseases

阿部 一晴*1, 齊藤 明*2, 山口 大*2
 Issei ABE*1, Akira SAITOU *2, Masaru YAMAGUCHI*2
 *1 京都光華女子大学 キャリア形成学部
 *2 公益財団法人大学コンソーシアム京都 教育事業部
 Email: i_abe@koka.ac.jp

あまし: 大学コンソーシアム京都における大学間連携主要事業に、加盟大学等による単位互換がある。単位互換専用に企画された科目の他、各大学が相互に提供する科目等から構成されている。2020 年度以降は感染症拡大に伴う教室での対面授業への制約等からオンラインを中心とした例年とは異なる運用を余儀なくされた。受講生アンケートを通じて、感染症拡大前後の単位互換授業への評価の比較とそこから読み取れる単位互換事業の可能性、課題等について報告する。

キーワード：単位互換授業，大学間連携，コンソーシアム，感染症拡大

1. はじめに

大学コンソーシアム京都は、1998 年 3 月に文部大臣（当時）より財団法人（2010 年より公益財団法人に移行）としての設立認可を受けた。法人格を持つ大学コンソーシアムとして、全国最大規模の事業を展開している。この中でも加盟大学相互の単位互換事業は、財団の前身である「京都・大学センター」設立当初に開始された中核事業である。提供科目数は 500 科目規模であったが、ここ数年大幅に減少している。ピーク時は年間のべ 10,000 名を超える受講者があったが、ここ数年受講者数も縮小傾向にある。

2. 単位互換事業の概要

大学コンソーシアム京都が実施している単位互換事業は、他大学が開講する科目を履修し、修得した単位が所属大学の単位として認定される制度である。

表 1：単位互換事業の推移 (2014～2022 年度)

年度	協定大学	提供大学	提供科目	出願者	履修者
2022	44	35	348	1,205	610
2021	45	38	345	704	627
2020	45	38	401	1,111	687
2019	45	40	415	1,405	1,271
2018	45	40	427	1,984	1,842
2017	46	40	435	2,549	2,400
2016	48	41	457	3,369	3,120
2015	48	43	589	3,615	3,412
2014	48	44	516	5,287	4,702

この単位互換事業には、現在 44 大学・短期大学が単位互換包括協定を締結し、これまで毎年 400～500 科目前後を提供していたが、最近は減少傾向にある。受講者数は、ピークであった 2001 年度にのべ 14,000 名を超える出願、10,000 名を超える受講があった。

ここ数年の推移を見てみると、感染症拡大前の 2019 年度は 415 科目の提供、1,405 名の出願、1,271 名の受講であったが、2020 年度、2021 年度は感染症

拡大という事態に直面し、出願者数、履修者数は例年より大幅に減少した。2022 年度の出願者数は増加したが履修者数は減少したままであった。(表 1)

これとは別に「京(みやこ)カレッジ」という名称で提供している社会人向けの生涯学習に毎年約 1,500 名前後の出願があり、このうち一部科目は単位互換事業に相乗りという形での受講となっている。こちらも 2020 年度、2021 年度は出願者数、受講者数ともに例年より大幅に減少した。2022 年度も減少したままではあるが、単位互換とは異なり若干ではあるが回復の傾向が読み取れる(表 2)

表 2：京カレッジ(生涯学習)事業の推移 (2013～2023 年度)

年度	科目提供 大学等	提供 科目数	出願 科目数	出願者数						一人あたり 併願科目 数※1	受講許可 者数
				<実数>			<延べ数>				
				前期	後期	合計	前期	後期	合計		
2023	23大学 2機関	165科目	79科目 前期79科目	818名	-	818名	1,142名	-	1,142名	1.4科目	818名
2022	23大学 2機関	179科目	83科目 前期83科目	801名	22名	823名	1,249名	29名	1,278名	1.5科目	781名
2021	26大学 1機関	198科目	91科目 前期88科目	703名	11名	714名	1,157名	13名	1,170名	1.6科目	672名
2020	29大学 2機関	224科目	97科目 前期95科目	627名	7名	634名	1,070名	25名	1,095名	1.7科目	723名
2019	31大学 2機関	257科目	122科目 前期122科目	812名	7名	819名	1,558名	12名	1,570名	1.9科目	1,329名
2018	34大学 2機関	274科目	120科目 前期115科目	773名	14名	787名	1,407名	15名	1,422名	1.8科目	1,297名
2017	30大学 2機関	276科目	127科目 前期121科目	1,048名	7名	1,055名	1,655名	24名	1,679名	1.6科目	1,315名
2016	31大学 2機関	314科目	154科目 前期149科目	812名	21名	833名	1,576名	34名	1,610名	1.9科目	1,292名
2015	34大学 2機関	449科目	178科目 前期174科目	809名	10名	819名	1,921名	25名	1,946名	2.4科目	1,743名
2014	34大学 1機関	373科目	172科目 前期159科目	698名	18名	716名	1,701名	47名	1,748名	2.4科目	1,525名
2013	36大学 1機関	428科目	194科目	506名	16名	522名	1,074名	40名	1,114名	2.1科目	-

3. 単位互換事業の感染症拡大による変化

2021 年度の単位互換事業において、加盟校から 345 科目の提供があった(感染症拡大前の 2019 年度は 415 科目)。出願者数は延べ 704 名であった(同 1,405 名で 701 名減(▲49.9%))。履修者数 (実際に単位互換授業を受講した学生数)は延べ 627 名(同 1,271 名で 644 名減(▲50.7%))、出願者数に対する履修者

数の割合(履修率)は89.1%であった(同90.5%)。2022年度は、348科目(同67科目減)提供、1,205名の出願(同200名減(▲14.2%))、610名の履修(同661名減(▲52.0%))となったが、履修率は50.6%と大幅に低下している。

単位互換授業は各大学のキャンパスで開講されるオンキャンパス科目、大学コンソーシアム京都の活動拠点であるキャンパスプラザ京都で開講されるプラザ科目とPBL科目から構成されるが、従来はいずれも対面授業が基本であった。感染症拡大に伴い、2021年度提供した345科目のうち46科目がオンラインのみ、53科目がオンライン併用であった。2022年度は348科目のうち32科目がオンラインのみ、38科目がオンライン併用となり、徐々にではあるが対面授業への回帰も進んだ。

4. 感染症拡大前後の受講生アンケート比較

単位互換受講生対象に Web 上のシステムでアンケートを実施している。感染症拡大前後の受講生の変化を見る目的で結果の比較をおこなう。ここでは、総合的な視点として「単位互換制度への満足度」に着目した。回答者数は、感染症拡大前の2018年度454名(履修者数に対する回答率は24.6%)、2019年度218名(同17.2%)、感染症拡大後の2021年度143名(同22.8%)、2022年度155名(同25.4%)であった。回答者数および回答率は年度により多少ばらつきはあるが、受講生の20~25%から回答を得ている。

総合的な単位互換制度への満足度を問う設問への感染症拡大前の各年度の回答は以下のとおりである。(図1、図2)

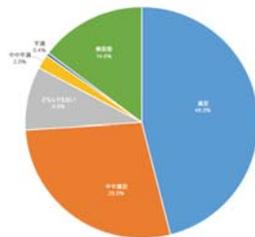


図1：2018年度受講生満足度回答



図2：2019年度受講生満足度回答

「満足」と「やや満足」の回答合計が2018年度74.0%、2019年度76.6%であった。満足度合の配分は若干異なるが、概ね回答者の4分の3が満足しており、「不満」「やや不満」の回答はいずれの年度も約2%であった。同じく感染症拡大後の各年度の回答は以下のとおりである。(図3、図4)

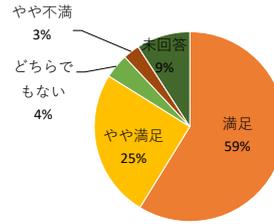


図3：2021年度受講生満足度回答

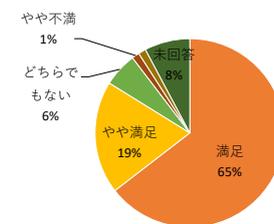


図4：2022年度受講生満足度回答

「満足」「やや満足」の回答合計が2021年度、2022年度ともに84.0%であり、感染症拡大前と比較して満足度は上がっている。本来対面が基本であった単位互換授業の一部または全部がオンラインとなったことにより受講生の評価が下がるのではないかと考えたが、少なくともその様な結果にはなっていない。ただし、オンライン授業に関しては、他大学キャンパスで授業が受けられるという単位互換授業ならではのメリットが得られにくかったといった否定的な自由意見もあった。

5. まとめと今後の課題

突然の感染症拡大に伴い、2020年度は大学コンソーシアム京都の単位互換授業も年度始めから開講延期・中止や急遽オンラインへの移行を余儀なくされた。2021年度は、多くの大学でオンライン授業のための設備や支援体制の整備等も進み、オンライン授業がより多く開講された。2022年度はそれが更に拡大する一方、対面に戻る授業も増えた。ここ数年で単位互換授業はその在り方や形式が大きく変化したと言えるが、受講生の満足度は下がっていないことがわかった。学習という意味での単位互換授業の役割は従来どおり、もしくは従来以上に果たしていると考えられる。感染症拡大は落ち着きを見せ、今後は新たなノーマルとしての大学教育環境を更に整えていくことになるが、その中での複数大学間の単位互換事業の役割や位置づけを今一度見直していく必要があるのかも知れない。

参考文献

- (1) 阿部一晴, 安福裕一郎, 安部明雄, 吉田真士: “感染症拡大下の大学間単位互換授業に対する受講生の評価”, 教育システム情報学会, 第47回全国大会講演論文集, pp.211-212 (2022)
- (2) 公益財団法人大学コンソーシアム京都, <http://www.consortium.or.jp/> (2023)